

プレオネクシアとメテクシス —自然の正義とゼウスの正義—

加 茂 英 臣

千葉大学・教育学部

Pleonexia and Metexis —Natural Justice and Justice of Zeus—

KAMO Hideomi

Faculty of Education Chiba University Japan

本論は、〈フロネーシス：思慮〉概念の研究に連なる論考である。プレオネクシアとは、〈より多くとる〉ことによって〈他者を凌ぐ〉自然欲望のことをいう。B.C. 5世紀末のアテネで、この新思潮（獲得）が伝統的なメテクシス（分与・配分）の社会を席捲した。〈自然の正義〉が〈ゼウスの正義〉を席捲したのである。この両者の関係を、ヘロドトスとトゥキュディデスの『歴史』を経由することによってプラトンの欲望論を新たに検討し直し、プレオネクシアという現象を洗い出してみる。

キーワード：プレオネクシア (Pleonexia) メテクシス (Metexis) ヘロドトス (Herodotus)
ペリクレス (Pericles) テュキュディデス (Thucydides)

序

プラトンの『ゴルギアス』と『国家』は〈正義論〉であると同時に不正義の根拠としての〈欲望論〉であることは誰も否定しはしないだろう。

ペルシア戦争が終わったB.C. 479からマケドニアに敗北するB.C. 338/7までが古典期とされている。ソロンはそれ以前のアルカイック期に属する政治家兼詩人である。そのソロン (B.C. 640頃—B.C. 560頃) はかつて、

多くの富 (olbos) が不健全な心の人々に訪れるときは、
〈貪欲 (koros; greed for more)〉は〈驕り (hybrin)〉を生む。
(tiktei gar koros hybrin) (Solon, Fragments 6)

というエレジーの一節をもって、大衆デーモスと貴族の間の過度な欲望闘争（階級闘争）を調停しようとした。

このエレジーの一節においてソロンが上記アルカイック期に使用した〈貪欲／満足〉を示す〈コロス：koros〉という術語は、ヘロドトスとトゥキュディデスによるペルシャ戦とペロポネソス戦の歴史記述を通じてB.C. 5世紀後半には〈より多く一持つ：pleon-echein〉欲望、あるいはその名詞形〈プレオネクシア〉という文字通りの即物的な術語で表現されるようになった（〈pleon-echein〉= pleonexia: desiring to have more）。

プラトンの二つの対話篇のキーワードが〈プレオネクシア〉であることにも異論はないだろう。ヘロドトスやトゥキュディデスもペルシャやアテネの〈力による支配 (archē)〉、いわゆる帝国の膨張欲望を記述するときに

すでに使用している〈プレオネクシア〉という語をプラトンが使用するということは、かれがB.C. 5世紀後半以来アテネを支配した政治的歴史的状况（トボス）に参入していることを意味する。アテネB.C. 5世紀末は、アナクサゴラスを含めたイオニア自然哲学、それを後ろ盾にしたソフィストの自然主義的倫理思想、ペロポネソス側の〈陸の支配〉に対するアテネの〈海の支配力 (sea-power)〉を背景にした三段櫓船の漕ぎ手、商人や職人を含むテーテス層のデーモスの台頭、貢租金に支えられたペリクレスの煌びやかな民主政治等、めまぐるしい知的政治的変動が渦巻く変革、軋轢の新時代であった。

海軍力に象徴されるこのような新時代の高揚にも拘らず、陸の王者スパルタに敗れアテネ民主政は荒廃した。その負の遺産としてスパルタによって擁立された寡頭政府を再び倒した復活民主政のもとでソクラテスが告訴され、アテネ市民は裁判の結果彼の死刑 (B.C. 399) を採決した。このような一連の政治的修羅場を生きたプラトンの政治的屈託と鬱屈は、計り知れないものであっただろう。

このような政治過程を導いたアテネ民主政の主役デーモス、それを指導したペリクレスの帝国主義政策をプラトンは弾劾する。哲学者ソクラテスの弟子としてプラトンの問題は、いったい彼らは自分自身の生にかんして何を〈考えている〉のだろうかという仕方で彼らの生にかんする構想の批判に結集する。勝ち残る〈ためには〉、生き残る〈ためには〉、スパルタを凌駕する〈ためには〉、どうしたらいいかという仕方の思考が全てなのである。ペリクレス／トゥキュディデスの報告は戦略・政策とその成功と失敗についてのprudentialな思考に終始し、戦略行為自体の意味（モラル）を問うことがない。モラルとポリシーは次元の異なる思考である。

連絡先著者：加茂英臣

時代の現実に奉仕するということが政策的理性〈prudence〉のリアリズムである。それは道具理性ともいわれ、その働きは手段にかかわり目的自体の意味を思案することがない。そういう時代の趨勢にソクラテスの弟子プラトンは絶望したのだろう。

B.C. 5世紀末以来のこのような政治的トボスに〈プレオネクシア〉という独特の欲望語も属していたのであって、これがプラトン固有な術語であったということではない。〈プレオネクシア〉はそのような外部、周縁の共同歴史のざわめきに取り囲まれた言葉である。プラトンのテキストの内部にとどまる分析は、この語の厚み、ニュアンスを引き出すことができない。そこでプラトンのテキストの歴史的外部へ迂回してみることによって、現実に即した具象の意味が明かになる。当論はそのような迂回によって『国家』と『ゴルギアス』の欲望論の現実と歴史的厚みを回収する試みである。

プラトンのテキストは、プラトン自身が自分の近傍を描いたものであって、外部・外周の輪郭は当然ぼやけている。しかしテキスト生成の順序は逆のはずであって、近傍を取り囲む周縁の波紋が中心に向けて凝集し、プラトンという主体がそれに応じて自分の近傍を描くことになる。そのような周縁とは、ここではたとえばヘロドトスやトゥキュディデスの『歴史』記述である。テキスト内部にとどまる限り、プラトンの欲望論、したがって正義論の意味は充実力を欠き、プラトンという独自性と地方性に矮小化されるだけで終わってしまう。プラトンの政治論・欲望論の処理の仕方（イデア論／哲人王政）は筆者は支持することができないが、そのような対応の選択をしなければならなかった時代の制約を考えると、無条件に否定もできなくなる。そうするしか仕方がなかったのだ。貢租金は贅を尽くしたアクロポリスとなり、銀山は無数の三段櫓船やペイライエウス港の構築と長い防護城壁となって威光を発揮する煌びやかなアテネではある。幸福なアテネは、その内部が放漫と傲慢によって膿み爛れている膨張欲望の悪の精華でしかなかったという解釈も成り立つ。

ここで、プラトンのそのような膨張欲望を意味する〈プレオネクシア〉という術語に関して概念的な方向付けをしておく。

岩波文庫版『国家』では第I巻20節（349B2-3）で使われる〈pleon echein（より多く一持つ）〉に註を付けて、訳者（藤沢令夫）はこの語の独自の構造に注意を促している。

以下において、「プレオン・エケイン」（pleon echein）、「プレオネクテイン」（pleonektein）という言葉と観念を中心として議論が展開される。この言葉は「（自分の分け前よりも、あるいは、他人よりも）多くを持つ・取る」「欲ばる」という意味であるが、また、「分をおかす」「やりすぎる」「超過する」とか、「（相手）をしのぐ」「凌駕する」とかいった意味にも及び、ここでは、これらすべてを含んだ広い意味連関と適用範囲で用いられている。このため、日本文のなかで訳語を固定的に一貫させることが不可能となり、「分をおかしてしのぐ」「……

より多くのことをする」という訳を中心にしながら、場合に応じて適宜訳し分けざるをえなかったが、「プレオン・エケイン」「プレオネクテイン」という原語は一定していることを承知されたい。¹

この語〈pleon echein〉は、『ゴルギアス』篇のカリクレスの議論からニーチェが援用しドイツ語の構造を利用してそのまま〈Haben- und Mehrhaben-wollen〉とドイツ語化し、さらにこれを〈Der Wille zur Macht〉「力への意志／権力意志」として自分の哲学を駆動する根本概念としたことはドッツの研究によって確固たる事実として知られている。² 食欲とか性欲とか人間の一次的な生理欲望をそのまま名指すのではなく、これをベースにした〈より多くの所有／享受を通して他者を凌駕する〉という膨張する欲望構造（他者一所有一誇り）が表現されているのが特徴的で、当時の政治的利害闘争、盟主／指導者（hēgemōn）ではなく力による支配すなわち帝国（archē）としての膨張主義的欲望の構造をよく映した術語である。限度を超えた拡大、越境、尊大、自然な割り当てを超えて取る、というような膨張欲望を意味している。まずこの語は特に政治上のライヴアルの行為に対して、〈貪欲／不当に余計に取る〉という非難のレッテルとして、記述語ではなく行為遂行的言語として使われたということを、Ryan K. バロットは『古典期アテネにおける貪欲と不正義』のなかで指摘している。³

K. アルグラ（Algra）の論文「プラトンのトラシュマコスに関する考察：プレオネクシアに対する所見」（1996年）は、『国家』に頻出するこの語にかんして「われわれはキーワードを扱っているようだ」と主張して丁寧にその使用箇所すべてを数え上げている。⁴ この作業に対してバロットは、

もしそうだとするならば、われわれは間違いなく『国家』という対話篇を超えた文化総体のキー用語を扱っていることになる。もっと広い見地からいえば、〈プレオネクシア〉とその様々な連関語によって表現されているアテネのアルカイック期と古典期における、歴史、イデオロギー、そして倫理と政治思想のキーとなる観念（key-idea）を扱っていることになるのだ。⁵

とアルグラの作業の狭隘さを超えていくことを意味を論じている。哲学サイドに位置する筆者ではあるが、バロットの指摘するような歴史的視点を經由しないで対話篇の内的分析に終始することは、プラトンが対峙しなければならなかった問題自体を矮小化してしまうことにつながると考える。

バロットの労作からわかるように、この「プレオン・エケイン／プレオネクテイン」とその名詞形「プレオネクシア」はプラトン固有のものではなく、ヘロドトス在使用しトゥキュディデスも多用する5世紀末のアテネで使用された政治的術語である。例えば創作年代が約B.C. 425年頃とされる〈ある古き寡頭派〉による政治的パンフレット『アテナイの国制』（I-2）は、この語独特の含みが確認できるテキストでもある。

まず初めに、私は次の点を指摘したい、ここ「アテナイ」では条理にかなって、貧民達も民衆も (hoi penētes kai ho dēmos), 名門の人々や富裕者達 (tōn gennaion kai tōn plousion) 〈より幅を利かせている (pleon echēin)〉が、それというのも、民衆が艦船を操縦する人であり国力の充実者であるからで、「民衆である」舵取り達、甲板長達、副甲板長達、見張り人達、船大工達——彼等こそ重装歩兵達 (hoi hoplitai) すなわち名門の人々 (hoi gennaioi) や良き人々 (hoi krēstoi) よりはるかにまさって国力の充実者であるからだ。このような経緯から、すべての人々は抽籤や挙手採決で官職に就任出来、市民で望むものは誰でも「民会で」発言が許されるのは、条理にかなっている。⁶

プラトンがあまり説明することのないアテネ民主政の隆盛と海軍力の当時の関係がよく説明されている。パンフレットの著者である〈古き寡頭派 (an old oligarch)〉は、アテネの最下層テテス (プラトンが嫌う職人や商人、三段権船の漕ぎ手等)、いわゆる〈デーモス〉の覇権を不当だとしながらも、アテネ民主体制の客観的分析を通じてその隆盛が残念ながら〈条理にかなって: dikaios〉いると評する自己防衛の屈折を示す興味深いパンフレットである。

上記引用の

貧民たちも民衆も (hoi penētes kai ho dēmos), 名門の人々や富裕者達 (tōn gennaion kai tōn plousion) より幅を利かしている (pleon echēin)〉

〈…より幅を利かしている〉と訳されている〈pleon echēin〉は、貴族である著者のイデオロギー上の不当感を表現している。民衆・貧民がわれわれ貴族を不当に、分を超えてより多くを取っている、不正に凌駕し搾取しているという風に。これはアテネ国内での、デーモスの膨張欲望の支配という不正義〈プレオネクシア〉の指弾である。プラトンもおそらくこの寡頭派と同じ屈託をもって〈プレオネクシア〉という欲望構造を分析したのに違いない。

さて、テキストの外部へ迂回する論証を、プラトンの手になる〈ヘロドトスのパロディー化〉から始めよう。パロディー化といっても、哲学的に創造的な虚構の仕掛けのことであって、単に修辭的な用法をいうのではない。このような意味での想像力の駆使、フィクショナルティー、比喩やパロディー化は、プラトン哲学の絶対的な力となっていることは周知のところである。

第一章

ヘロドトス：ギュゲスとクセルクセス

これは、ハリカルナッソスの人ヘロドトスの〈研究調査の提示 (historiēs apodexis)〉である。この提示は、人間界の出来事が時の移ろうとともに忘れ去られ、ギリシア人や異邦人 (バルバロイ) の果た

した偉大な驚嘆すべき事蹟の数々——とりわけて両者がいかなる原因から戦いを交えるに至ったかの事情——も、やがて世の人に知られなくなるのを恐れたためである。(岩波文庫版、松平千秋訳『歴史』第Ⅰ巻「序」：なお不恰好ではあるが、テキストの語順と〈apodexis〉という名詞に関して、この点でのみ文章を変えている。訳語として「書き述べる」を文字どおりの「提示」に変えている。)

イオニアのハリカルナッソス出身のヘロドトスは前484頃～425頃生きたといわれる。『歴史』は上のような「序」で始まっている。

日本語訳『ギリシア民主政治の出現 (太田秀道訳、平凡社、1971年)』で有名な歴史家フォレストが書いた論文「ヘロドトスとアテネ」によれば、「ヘロドトスは既に自身熟練した政治家であったのだが、約B.C. 450からおそらく444/3年の間アテネに滞在した」という。¹

また、桜井万里子は、

ヘロドトスがその著作を執筆した時期については残念ながら不明である。ただし、前425年に上演されたアリストファネス作『アカルナイの人々』515行以降に、戦争の原因は女の略奪だという科白があって、これはヘロドトスの作品冒頭の部分 (I. 1-4: 筆者補記) のパロディーだった可能性があり、そうであれば前425年までには彼の作品はアテナイの人々に知られるところとなっていたのかもしれない。²

と語っている。

アテネに約7年余り (?) 滞在しペリクレスの友人でもあったヘロドトスであるならば、彼の存在と作品はなんらかの仕方で当時すでに知られていたに違いない。

しかし『アカルナイの人々』よりももっと濃厚に仕組まれたプラトンによる哲学パロディーが〈女の略奪〉に続く部分に関して、プラトンの『国家』篇第Ⅱ巻にある。〈ギュゲスによるカンダレウス王の王位篡奪行為 (『歴史』 I. 8-12)〉が〈ギュゲスの指輪〉という創作挿話によってパロディー化されている。それも、〈プレオネクシア〉の自然性というテーマのもとにある。

I. ギュゲスの指輪

プラトンはヘロドトスに直接には言及していないし、ヘロドトスの話自体には自分を不可視にする指輪は登場しない。ヘロドトス自身もこの話が自分の創作ではないことを〈詩人アルキロコスもそのイアンボス六脚詩に歌っている〉 (I-12) と明かしている。そこで古典学者たちは、ヘロドトスの依拠した出典にたいしてプラトンの使用した〈ギュゲスの指輪〉入りの別の出典があることを前提にして、多くの労をこのつじつま合わせの作業に費やしている次第である。

ヘロドトス自身のギュゲス物語は次のようなものである。サルデイス王に仕えたギュゲスが、王カンダレウス自慢の妃の美の証人であることを不本意な仕方 (不可

視であること：就寝の折に寝室の扉の後に潜むこと）を強いられ、妃の美しい裸体を見届けることになる（見られずに見るギュゲス）。しかしギュゲスに気付いて誇りを傷つけられた妃は、ギュゲスを呼び出し〈カンダレウスを殺して、私とリュディアの王国をわがものとするか、さもなくばそなたは、この場でただちに死なねばならぬ〉と二者択一の選択をせまる。ギュゲスは前者を選択し妃をものにすると同時に王位を篡奪する。他人に裸体を見せつけた王への復讐のお先棒担ぎを強いられたギュゲス、というのがヘロドトスの語る話である。（『歴史』I. 8-12. テキストは松平千秋訳の岩波文庫版を使用）。

この話は、このようにしてリュディアの王位を篡奪したギュゲスの何代か後の王が有名なクロイソス王であり、ギュゲスの犯した不正義を巡りめぐってクロイソスが返済するという正義論の筋に組み込まれる仕組みになっている。ギュゲス当人は直接意図していなくとも神の正義によって裁かれるというのが、『イーリアス』以来ギリシア古来の〈神の正義論〉の筋書きである。その意味でこれはロイド・ジョーンズのいう〈ゼウスの正義〉³ の筋書き通りの話である。

しかし、プラトンのギュゲスの指輪の話は、そのような〈ゼウスの正義〉をソフィストの〈自然の正義〉に差し換えてパロディー化しているのである。筆者もA. レアード（Laird）の刺激的論文「ギュゲスに関する変遷を診断する（*Ringin' the Change on Gyuges*）」にしたがって、このギュゲスの指輪の話は、〈古典学者（classicists）〉が躍起となって長きにわたって探し求めてきたヘロドトスとは別の出典に基づくのではなく（同論文p. 13：プラトンの哲学の本質的力である虚構性を理解しない実証的古典学者の営みをレアードは哲学という営みの観点から皮肉っているのである）、プラトン自身がヘロドトスに基づいて挿入した作り話であることを主張する。別の典拠を探す必要はない。こんなにプラトンの都合にかなった元の話などどこを探してもあるはずもない。そしてレアードはそのようなフィクショナルリティーがいかにもプラトンの哲学に不可欠な力であるかを論ずるためにギュゲスの指輪の話に一章を割いているのである。⁴ 実際プラトンのアナロジーを使用する才は尋常ではない。どこに類比やパロディーが仕掛けられているか分かったものではない。

以下に『国家』第Ⅱ巻の該当箇所を引用する。

つぎに、正義を守っている人々は、自分が不正をはたらくだけの能力がないために、しぶしぶそうしているのだという点ですが、このことは、次のような思考実験を試みればいちばんよくわかるでしょう。つまり、正しい人と不正な人のそれぞれに、〈何でも望むがままのことができる自由（*exousian poiein ho ti an boulētai*）〉を与えてやるわけです。そのうえで二人のあとをつけて行って、両者それぞれが欲望によってどこへ導かれるかを観察すればよい。そうすれば、正しい人が〈膨張欲望に駆られて：dia tēn pleonexian〉、不正な人とまったく同じところへ赴いて行く現場を、われわれははっきり見ることができるでしょう。〈すべて自然状態にある

ものは（*pasa physis*）〉、この〈膨張欲望（*pleonexia*）〉をこそ善きものとして〈追求するのが本来のあり方（*pephyken diōkein*）〉なのであって、ただそれが、法の力でむりやりに平等の尊重へと、わきへ逸らされているにすぎないのです。（岩波文庫版『国家』Ⅱ. 358b8-c8, なおプレオネクシアに対応する〈欲心〉という訳を都合により〈膨張欲望〉に変更している。また下線と太字の強調も筆者による。）

〈何でも望むがままのことができる自由（*exousian poiein ho ti an boulētai*）〉という自然状態が与えられれば、正しい人というエートスを身につけた人を含めすべての人間はプレオネクシアを発揮するというのである。ソフィストのノモス（エートス：convention）に対する自然状態（*physis*）という地平で〈プレオネクシア〉という5世紀末の欲望術語が使用されている。

ソクラテスに対してグラウコンは〈不正義のほうが正義より割に合う〉というトラシマコス議論を、〈法律習慣上でしかない正義〉に対する〈自然本来の正義〉というソフィスト流の土俵を設定して、ギュゲスの指輪の挿話を始める。

〈私が言うような何でもしたい放題の自由（*hē exousia hēn legō*）〉というのは、むかしリュディアの人ギュゲスの先祖が授かっていると伝えられるような力が、彼ら正しい人と不正な人にも与えられたと想像してみれば、いちばんよくわかるでしょう。

ギュゲスは、羊飼いとして当時のリュディア王に仕えていましたが、ある日のこと、大雨が降り地震が起って、大地の一部が裂け、羊たちに草を食わせていたあたりに、ぽっかりと穴があきました。彼はこれを見て驚き、その穴の中に入って行きました。物語によれば、彼はそこにいろいろと不思議なものがあるのを見つけたのですが、なかでもとくに目についたのは、青銅でできた馬でした。これは、中が空洞になっていて、小さな窓がついていました。身をかがめてその窓からのぞきこんでみると、中には、人間並み以上の大きさの、屍体らしきものがあるのが見えました。それは、ほかには何も身に着けていませんでしたが、ただ指に黄金の指輪をはめていたので、彼はその指輪を抜き取って、穴の外に出てきたのです。

さて、羊飼いたちの恒例の集まりがあったときのことです。それは毎月羊たちの様子を王に報告するために行なわれるものですが、その集まりにギュゲスも例の指輪をはめて出席しました。彼はほかの羊飼いたちといっしょに坐っていましたが、そのときふと、指輪の玉受けを自分のほうに、手の内側へ回してみたのです。するとたちまち彼の姿は、かたわらに坐っていた人たちの目に見えなくなって、彼らはギュゲスがどこかへ行ってしまったかのように、彼について話し合っているではありませんか。彼はびっくりして、もう一度指輪にさわりながら、その玉受けを外側に回してみました。回してみると、こ

んどは彼の姿が見えるようになったのです。

このことに気づいた彼は、その指輪がほんとうにそういう力をもっているかどうかを試してみました。結果は同じこと、玉受けを回して内側に向ければ、姿が見えなくなるし、外側に向けると、見えるようになるのです。

ギュゲスはこれを知ると、さっそく、王のもとへ報告に行く使者のひとりに自分が加わるように取り計らい、そこへ行って、まず王の妃と通じたのち、妃と共謀して王を襲い、殺してしまいました。そしてこのようにして、王権をわがものとしたのです。

長文ではあるが、それだけの価値があると考えて全文を引いた。この自然状態を導くための不可視性の構想（ギュゲスの指輪）の源は、ソフィスト、アンティポン（Antiphon, B.C. 480頃-411頃）の『断片（Fragments）』「真理について（peri tēs alētheias）」であることは間違いないだろう。

そのアンティポンの断片から引証しておく。

22b. 「Fragments B」

[Col. I] 正義（dikaiosynē）とは、ところで、そこでひとが自分が市民であるポリスの法律習慣（nomima）を破らないという問題である。だから見ているひとがいるまえでは法を重んじ、見ているひとがいなくて自分だけの場合は自然を重んじるならば、ひとは正義を自分自身のためにもっとも有効に利用することになるだろう。というのは法律の要求とは外から強いられる偶然である（epitheta）のに対して自然は必然なのだから（ta men gar tēn tōn nomōn epitheta, ta de tēn physeōs anankaia）；法律は生まれながらのものではなく合意でしかないのに対して自然は [Col. 2] 合意ではなく生まれながらのものなのだから（kai ta men tēn nomōn homologēthenta ou phynta estin, ta de tēs physeōs phynta oux homologēthenta）。したがってひとが法律を侵犯してもそれに合意をしているひとびとに気づかれない場合には恥と罰なしに逃れることができる。そうでない場合には逃れることができない。

他方もしひとが内在的自然の要求を侵犯する場合は、それを見ているひとがいなくても害悪はそれに応じて少なくなるわけではないし、皆が気づいてるとしても害悪がそれに応じて多くなるわけではない。⁵

このアンティポンの議論は、〈証人がいる／いない〉という〈可視／不可視性〉を〈皆が見ている法律習慣状態／皆が見ていない自然状態〉に連繫させている。このソフィストの筋立てに従って、プラトンはヘロドトスのギュゲスにまつわる不可視性の挿話を『国家』篇で〈ギュゲスの指輪〉の〈不可視性〉にすり替えてしまった。扉の後ろに隠れる程度の経験的不可視はいとも簡単に発覚し、無条件な不可視性としての自然状態を導くことができないからである。この指輪の〈可視／不可視〉は、『ゴルギアス』篇では〈法律習慣（他人を無視できない弱者）〉

と〈自然状態（他人を無視できる強者）〉の〈可視性／不可視〉の問題としてすでに語られていた。こうして他人を圧倒できる強者の力の不可視性（圧倒力）は、次に扱う『ゴルギアス』篇でカリクレスの語る強者クセルクセスの〈自然の正義〉の話と連動している。『国家』篇のこのテーマはそれより先に書かれた『ゴルギアス』篇のテーマをそのまま引き継いでいることがわかる。

正義論の文脈で語られるアンティポンの議論と〈ギュゲスの指輪〉の話とのこのあまりにも不自然な平行は、アンティポンが〈指輪〉創作の構想上の典拠であることを異論の余地なく明かしているだろう。

ところで自由と訳される〈exousia〉とは〈ex-estin〉が語源で〈…することが許されている〉という意味合いで〈自由である〉ことを意味する肯定的な言葉であるが、この語はプラトンにおいてはギュゲスの指輪の魔力に例えられ、民衆／デーモスに固有な〈不必要な欲望〉、僭主に固有な〈不法な欲望〉の恣意性を揶揄する術語となっている。〈正義〉の反対語〈不正義〉の同義語でもある〈プレオネクシア〉につながる〈思いつくことを何でもするという〉抑制の箍が外れた〈無抑制（acholasia）〉が、自由という肯定的評価語で屈折を入れて表現されているのである。

この事態は、表現の脱価値性という問題の意味を考えさせる。われわれは、評価から中性的な記述へと逃れることができるのか。あるいは中性的な表現をすることの意味とは何なのか。だれがそのような視点に立つことができるのか。いわゆる科学的中立性とはいったい何のためにあるのか。絶対的純粋、絶対的ゼロの視点を想定することの意味は何なのか。プラトンもソフィストもそのような視点に立って語ってはいない。自然的自由と言いながら、ソフィストはこれを肯定するイデオロギーのもとに、プラトンはそれを皮肉の価値のもとに語る。しかしそれを、無価値化したゼロ価値の中心点から中性的に記述することの価値？とは。これは後の章で扱うトゥキュディデスの歴史記述（historiē）の問題につらなる。

ともかくここにおいて、アルカイック期のアテネを支配した〈ゼウスの正義〉の話が5世紀末アテネ民主政期に謳歌された〈自然の正義〉の物語に捻じ曲げられているのである。

ところで上に紹介したレアードは、同論文で桜井万里子と同じ典拠に基づいて以下のように指摘している。

『歴史』の第I巻はB.C. 425年には流布していた（current）と考えられている—多分『国家』が書かれる50年も前（B.C. 370年代：筆者補記）のことではあるが、対話の設定年代（dramatic date）にはるかに近い時期である。

そしてその典拠として、ヘロドトスのはじめの章—多分口承による流布の可能性がある—はアリストファネスの『アカルナイの人々』（B.C. 425年）のなかでパロディー化されていると長い間考えられてきたとして、〈W.W. How and J. Well, *Commentary on Herodotus* 1 (Oxford 1912) 448〉以下D. Asheri (1988), R. Pichler (diss. Muinich 1986) の参考文献を列挙している。⁶

こうしてプラトンは、ヘロドトスの『歴史』第Ⅰ巻の〈ゼウスの正義〉論の文脈で語られているギュゲスの〈扉の不可視〉物語を仕込み、B.C. 5世紀末のソフィスト・アンティポンの〈自然の正義〉論の構想に合うように、ギュゲスの〈指輪の不可視〉物語としてヘロドトスを捻じ曲げたのである。プラトンはヘロドトスと少なくとも彼の『歴史』の第Ⅰ巻を知っていたのである。なにが以上の論述の成果なのか。正義の侵犯は人間の〈驕り：hybris〉というヘロドトスの宗教的文脈が、不正義は割に合う、人間の自然性にもとづく経済合理性という世俗利害の文脈に移されていることの発見と確認である。ヘロドトスへの迂回なくしてこの確認は生じない。B.C. 5世紀末のプレオネクシアが席捲するアテネの知的政治的現状を歴史的に活写したのがトゥキュディデスだとしたら、プラトンは同じ状況を哲学的に活写したのである。以上がギュゲスの話である。

次にプラトンが、同じ手口で『歴史』の第Ⅷ巻をパロディー化する様を確認する。〈ギュゲスの指輪〉とおなじ手法でアルカイックな〈クセルクセスのギリシア遠征〉の話自然合理性の欲望論の土俵に移しかえる模様を『ゴルギアス』篇に就いて論じる。

II. クセルクセス

『ゴルギアス』から同じく長文を引用するが、便宜のためこれをA)とB)に分割する。以下の議論をソクラテスに対抗して主張するのは、ペリクレスに憧れる政治家志望のカリクレスという人物である。⁷

A)

しかしながら、ぼくの思うに、法律の制定者というのは、そういう力の弱い者たち、すなわち、世の大多数を占めるものたち人間どもなのである。だから彼らは、自分たちのこと、自分たちの利益のことを考えにおいて、法律を制定しているのであり、またそれにもとづいて賞賛したり、非難したりしているわけだ。つまり彼らは、人間たちの中でもより強い人たち、そして〈より多く持つ能力のある人たち (dynatous ontas pleon echein)〉をおどして、〈自分たちよりも多く持つことがないようにするために (hina mē autōn pleon echōsin)〉、〈余計に取ること (pleon echein)〉は〈醜い (aischron)〉ことで、〈不正な (adikon)〉ことであると言い、また不正を行うとは、そのこと、つまり〈他の人よりも多く持とうと努めること (to pleon tōn allōn zetein echein)〉だ、と言っているのだ。というのは、思うに、彼らは、自分たちが劣っているものだから、〈等しい分け前 (to ison)〉を持ちさえすれば、それで満足するだろうからである。

かくて、以上のような理由で、〈法律習慣 (nomoi)〉の上では、〈世の大多数の者たちよりも多く持とうと努める (to pleon zetein echein tōn pollōn)〉のが、不正なことであり、醜いこと (to aischron) であると言われているのであり、またそうすることを、人びとは〈不正行為 (adikein)〉と呼んでいる

のだ。だが、ぼくの思うに、自然そのものが直接に明らかにしているのは、優秀な者は劣悪な者よりも、また有能な者は無能な者よりも、〈多く持つ (pleon echein)〉のが正しいということである。そして、それがそのとおりであるということは、自然はいたるところでこれを明示しているのだが、つまり、それは他の動物の場合でもそうだけれども、特にまた人間の場合においても、これを国家と国家の間とか、種族と種族の間とかいう、全体の立場で考えてみるなら、そのとおりなのである。すなわち、正義とは、〈強者が弱者を支配し、そして弱者よりも多く持つこと (ton kreittō tou hēttōnos archein kai pleon echein)〉であるというふうに、すでに決定されているのだ。(『ゴルギアス』483b4-d6)

下線部分を注目してほしい。特にまた人間の場合においても、これを国家と国家の間とか、種族と種族の間とかいう、全体の立場で考えてみるなら、そのとおりなのである。これはカリクレス自身が第一人者として仰ぐ「近年 (B.C. 429：筆者補記)、亡くなったあのペリクレス」(503c) 指揮下のアテネのことを思えばいいだろう。とにかく〈プレオネクシア〉という自然力が発現するのは国家間における支配 (archē)、国家の膨張欲望としての帝国主義においてであることをカリクレスは吐露しているのである。特にデロス同盟の指導者、盟主の立場からアテネ帝国の支配者となったアテネのことである。それが、このA)の個所に続く以下の引用B)でペルシャのペリクレス、クセルクセスに転喻されていると考えて間違いはないのである。その引用B)に行く前に、論点を整理してから、特にドッズの『ゴルギアス』篇に関する見解を紹介しておきたい。

この引用箇所A)も、『国家』篇〈ギュゲス〉の引用の前半と同じ構成を持っておりますは〈自然の正義〉論の展開で始まっている。ソフィスト・アンティポンの〈ノモス／ピュシス〉論が強者／弱者論にからめて徹底して論じられている。自然の正義とは、強者が弱者〈より多くを取り〉、を〈支配する〉ことと繰り返し断言されている。強者の力はギュゲスの指輪の〈不可視力〉となり、指輪を持たない弱者は常に他人に圧倒される。ここでも〈プレオネクシア〉という欲望が他者の支配力〈アルケー：archē〉であることが繰り返し強調される。まさしく『国家』篇同様、いやそれ以上に〈プレオネクシア〉は『ゴルギアス』のキーワードになっている。そのような個所をいくつか拾っておく。

自然の正義とは、どういうことだと主張するのかね。強者は弱者を支配し、そして立派なものはない者よりも多くを持つという、そういうことかね。『ゴルギアス』488b4-5

この思慮あるものが支配し、他の思慮のない者たちは支配されるべきであり、また、支配するものは支配されるものよりも多く持つべきである、というわけなのだね。同書490a1-5。

それは、国家公共の事柄に関して思慮があり、そして勇気のあるひとたちのことだ、とね。なぜなら、その人たちこそ、国家を支配するのがふさわしいし、そして正義とは、その人たちがほかの人たちよりも、つまり支配する人たちが支配される人たちよりも多く持つという、そのことなのだからね。同書491c6-d2。（以上強調は筆者による）

『ゴルギアス』は、当時のアテネの膨張欲望に基づく現実政治を主導する具体的な政治家を、プラトンが直接名指しで指弾している特別な対話篇である。この点は、『ギリシア人と非理性』を書き、詳しいコメンタール付きのテキスト『ゴルギアス』を刊行したE.R. ドッズが特に強調するところである。

かれはこの対話篇がプラトン個人の政治的立場にかかわって、決定的に重要なものであったという。この対話篇は、ペリクレスに主導されたようなアテネの政治体制に、プラトンが最終的に決別するための書だという。第Ⅶ巻簡に照らしてみれば、『ゴルギアス』篇はソクラテスのための〈弁明（apologia）〉である以上に、家筋からも個人としても心から係わりとしたアテネの政治生活から、アカデメイアでの生活へ撤退することのプラトン自身のための弁明の書であることは明らかなのである。⁸

この対話篇の設定年代（dramatic date）は、「近年亡くなった、あのペリクレス」というカリクレスの発言から予測できる（『ゴルギアス』503c）。ドッズ自身は、様々な事情を拾い上げて慎重に〈B.C. 429-405〉を指定しているが、歴史学者フォレストは、『ゴルギアス』（503c）「近年亡くなった、あのペリクレス」というカリクレスの言葉をもとに、ピンポイントで恐らくB.C. 427年と断定する。⁹ これはペリクレスが死んで1-2年後で同時にプラトンの生まれた年でもある。

B.C. 5世紀末以降の自然主義的〈膨張欲望（プレオネクシア）〉による内外の他者を〈凌駕し／支配する（archein）〉ことに没頭するアテネ。ひととポリスの〈よき生（eu zēn）〉にとって、このような膨張欲望の構想（帝国主義）がなんの意味を持つかを反省することなく自然主義的に先導／扇動する演説家／政治家ペリクレスとはいったい何者であるか。またそのような指導者にしたがうアテネ市民とは何者であるか。この政治家／演説家／弁論家とそれに指導されるアテネ市民が、自分の生の構想として膨張欲望の充足にのみ定位していることに対して、ソクラテスの弟子プラトンは我慢がなかったのである。

若いころには政治参加を強く希望していたプラトンが、ソクラテスの死刑決定を最後の機縁として、アテネの政治からの最終的決別を宣言するための弁明の書がこの『ゴルギアス』（設定年代：427頃、成立年代：387頃）篇だというのである。B.C. 370年代に書かれた『国家』篇（設定年代：411年頃、成立年代：375年頃）の抽象性と比べてみるとよい。『国家』で語られる国家がアテネだとさえも書かれていない。ミルティアデス・キモン・テミストクレス・ペリクレス等の現実の政治指導者／弁論家／演説家の名を挙げてその膨張主義的政策とその業

績の意味を、具体的に論難するような対話篇は『ゴルギアス』において他にはない。

さてA)の引用のあとは、『国家』の場合と同じ段取りで、ヘロドトスの『歴史』の第Ⅶ巻にある、クセルクセスのギリシア遠征という挿話となる。

B)

なぜなら、ほかにいったいどういう正義をかかげて、クセルクセスはギリシアの地に兵を進めてきたのだろうか。あるいは、彼の父（ダレイオス一世）がスキュティア人たちのところへ攻め入ったのには、ほかにどんな正義があったのだろうか。あるいはまた、そういう例なら、ひとはほかにいくらでもあげることができるだろう。いや、それは言うまでもなく、この人たちがそういうことをしているのは自然—つまり〈正義の自然本来のあり方に従って（kata phusin tēn tou dikaion）〉であると思う。それにまた、そうだ、ゼウスに誓っているが、彼らはたしかに法にも従っているのだ。しかしその法とは、〈自然の法（kata nomon ge ton tēs phuseōs）〉であって、おそらくわれわれが勝手に制定するような法律ではないだろう。（同書483d6-e4：以上『ゴルギアス』の日本語訳は、『世界の名著』6「プラトンⅠ」〈中央公論社、1966年〉所収の田中美知太郎訳とこれをベースにした岩波文庫版（1967年）の加来彰俊訳を利用している。訳語を変えたところもある。）

『歴史』の第Ⅶ巻をみるとクセルクセスは、確かに欲望に駆られてギリシア遠征をおこなう気になったことは書かれているが、ヘロドトスの記述は、クセルクセスが〈自然の正義〉という大義名分を掲げてギリシア遠征を始めたと書かれてはいない。要するに「自然の正義」ではなくこの遠征はアルタバノスによって「ゼウスの正義」の相のもとに語られるのである。クセルクセスの遠征は「自然の正義」ではなく「ゼウスの不正義」すなわち〈傲慢／驕り〉すなわち〈ヒュブリス〉であると、評されているからである。

クセルクセスの善き忠告者の叔父アルタバノスはこのギリシア遠征を次のように評している。この話は長い紆余曲折を持つ話ではあるが、その経緯についてはここで説明を省いて、要所だけを抜き出す。まずはこのクセルクセスの言である。

わしは以上の理由により彼らを討伐せんとしているのであるが、つくづく考えてみるに、この遠征には次のような利点に伴っている。すなわち、もしアテナイ人ならびにこれと国土を接し、かのプリュギア人ペロプスの創めた国に住む者どもを平定すれば、われらはペルシアの版図をば実にゼウスの住い給う天空に境を接せしめることができるであろう。そなたらの協力の下にヨーロッパ全土を席捲し、これらの諸国をことごとく併呑して一国とした暁には、天日の輝くところわが国に境を接するものは一国もなくなるであろう。『歴史』Ⅶ. 8

クセルクセスのギリシア遠征の動機は、〈自然の正義〉である他国の世俗的支配ではなく、ゼウスと同等の支配圏を獲得することである。これはまさに〈ゼウスの不正義〉として神によって割り当てられた自然な東西の〈境界 (moira)〉を侵犯する越境であり、さらに神と同等な地位を望むに等しい。このような〈超大な思考 (phronein mega)〉は最大の〈不尊：ヒュプリス〉である。そのような不尊な遠征を思いとどまることをクセルクセスの助言者である叔父アルタパノスは次のように助言する。

神明はご自身以外の何物も〈驕慢の心をいдаく (phronein mega)〉ことを許し給わぬからでございます。同Ⅶ. 10.

ここでは〈驕慢〉と訳されているもとの語は〈hybris〉ではなく上に記した〈超大に考える (phronein mega)〉である。分を超えて超人間的に考えることをいい、これはギリシア悲劇などでしばしば〈ヒュプリス〉の同義語として使われる。超大な考えは神の領分だということである。そして、次の引用箇所が決定的な論点となる。発言者は、同じくアルタパノスである。

殿のお叱りを蒙りました時、私が悲しく思いましたのはお叱りを受けたことよりもむしろ、わがペルシャの選ぶべき道が二つあり、ひとつは傲慢を助長するもの (tes *hybrin* auxanousēs), 他は傲慢を撓め、持てるが上に持たんと望む心を (psychēn *pleonti* dizēsthai aei *echein*) 起こさせることがいかに災いの因となるかを戒めるものである時、殿がこの二途の内ご自身のためにもペルシア国民のためにも危険の多い道をお選びになろうとしたことでございます。同書Ⅶ. 16

バロットが論ずるように、「ホメロスやヘシオドスそしてソロンの作品はいずれも〈pleonexia〉という用語を使用していない」(Balot, 前掲書 4 頁) が、ここではたしかにこの語が用いられていることに注目したい。

ヘロドトスはペルシア戦争 (B.C. 500-479) の話を〈ゼウスの正義〉の文脈で語っている筈であるのに、そのなかでクセルクセスの膨張欲望をアルタパノスが〈持てるが上に持たんと：pleon echein〉欲する心と表現している。かれは5世紀後半のひとである。B.C. 5世紀末の術語がアルカイック期の〈ゼウスの正義〉の記述の中に紛れ込んでいることが問題である。

これはヘロドトスによくみられるアナクロニズムである。他にもオタネスを中心した合計7人でなされている〈国制論争 (constitutional debate)〉というよく知られた挿話もその一つである。プラトンの場合もそうであるが、このような創作には作者が属する制作年代とドラマの設定年代が自覚的／無自覚的に重なってしまうというアナクロニズムが生じる。もちろん作爲の錯誤の例もある。ヘロドトスが、オタネスを含めた7人に民主制、寡頭制、独裁制に関して論評をさせている。その内容からいって5世紀末にこそアテネで論じられたこのような

〈体制論〉を当時のペルシャ人が〈イソノミア〉などというような術語を交えて論議することはありえないからである。『歴史』Ⅲ. 80-83.

以上、ヘロドトス自身が『歴史』Ⅶ. 16で、クセルクセスのギリシア遠征の動機を自分の属するB.C. 5世紀末に属する言葉で〈pleon echein〉と時代錯誤的に記述しているのに当人はゼウスの正義の文脈でこの語を使用していること。引用A) からB) へかけてプラトンがヘロドトスのこの〈pleon echein〉を含む記述をそっくりそのまま使ってその文脈だけを〈自然の正義〉のそれに差し換えていること。この二つの記述のずらされた合致を偶然として受け流すことができるだろうか。同じ〈pleon echein〉を動機とする遠征がヘロドトスでは〈ゼウスの正義〉の文脈で語られ、プラトンでは〈自然の正義〉の文脈にそっくり移されているのである。こんな不自然な遠征動機の合致、と動機の文脈の不自然な不一致をそのまま偶然と受け流すことができるであろうか。プラトンは『歴史』第Ⅰ巻のギュゲスの記述と同じく、第Ⅶ巻のクセルクセスのギリシア遠征の記述を確実に聴取しあるいは読みその内容のしっかりした把握のもとに、このような手の込んだパロディー化の操作を行っているとしたか考えようがないではないか。

第二章

I. プラトンとトゥキュディデス／ペリクレス

チャールズ・カーン (Charles H. Kahn) というプラトン研究者に「プラトンのペリクレス追悼演説」という論文がある。『メネクセノス』篇の追悼演説の分析を通じてプラトンがトゥキュディデス版のペリクレス追悼演説、したがって『歴史』を知っていたことを論証している。彼は1963年のこの論文で、伝統的学説に抗して以下のように発言している。

ヴィラモーヴィッツ (Wilamowitz) の権威に圧されて、プラトンがトゥキュディデスに名指しで言及していないことを以って、彼が前世紀に関するアテネのこの偉大なる散文作家の作品を読んでいないと考える傾向が長い間続いた。ドゥ・ローミイ (Mme. de Romilly) による近年の〈不読の〉再確認にもかかわらず、本質的にそんなことはありえないというのが主な理由で、この見方は根拠を失ってきていると私は考えている。『メネクセノス』や『法律』第Ⅲ巻の前史の注意深い読解が、古い見解のありそうもないこと、さらに事実と矛盾することを示すのに十分である。プラトンがペリクレスの追悼演説に言及するとき、われわれがトゥキュディデスの一節とみなすものを正確に念頭においていることを、われわれの対話篇のテキストから示すことができる。¹

ドゥ・ローミイは「実際、プラトンにはトゥキュディデスの作品を知っていることを示唆するような言葉がなにもない」という言語上の痕跡の有無を根拠に、主

著『トゥキュディデスとアテネ帝国主義』の結論部「政治から倫理へ」でプラトンの不知を指摘している。²

当論は、この言語比較の手法を直接追うものではないが、本論の展開に土台を提供する重要な主張があるのでその限りでカーン論文の内容を提示しておきたい。

カーンの議論も、ふたたびドZZのコメンタリー付きの『ゴルギアス』を経由する。『メネクセノス』の制作年代を決定するにあたって、この対話篇で語られるアスパシアの演説がコリントス戦争（B.C. 395-386）の終結いわゆる〈B.C. 386年の王の平和：King's peace〉に言及してその時点で終わっていることの重要性を指摘し、その意味をカーンは説明する。（この平和はアルタケセルクスⅡ世によってもたらされた。またスパルタの名交渉役アンタルキダスの名をとって「アンタルキダスの平和」とも言う）その説明のために、カーンはドZZの『ゴルギアス』の24頁に遡及する。³

『メネクセノス』は「B.C. 386年より先に書かれたことはあり得ないし、その時点で終わっているからそのあと遅く書かれたこともないだろう。」というドZZの指摘をカーンもそのまま受け入れている。ドZZは『メネクセノス』が主著『ゴルギアス』に付されたコミカルな寸劇（afterpiece）として制作されているという自分の推測が正しいとしたら「後者の制作年代は約387-385年ころということになろう」としている。カーンもこのドZZの、ペリクレス政治の告発の主著『ゴルギアス』対、その茶化しとしてのパロディー版『メネクセノス』という魅力的な構想を受けて前著の直後の数年後という設定を追認している。『メネクセノス』をぎりぎりの前倒しで386年に設定すれば『ゴルギアス』篇もぎりぎり387年に設定できるというわけである。ドZZは大ディオニュソス祭の上演形式、主なる悲劇三部作とそのあとに続く野卑な〈サテュロス劇（a satyr-play）〉という組み合わせに、プラトンがそれぞれ『ゴルギアス』と『メネクセノス』を当てはめているのだという。そうすれば、『メネクセノス』の時代錯誤もはなはだしい奇想天外なキャストの意図も理解できるというわけである。

実際、コリントス戦争の戦没者の追悼演説が現在の問題なのに、そこにペリクレスの追悼演説の台本作者としてアスパシアが出てくる。そのアスパシアがこの対話篇の主演ソクラテスの先生でもあるなどという滅茶苦茶な筋書きなのである。40年ほど前に死んでいる人たちのことである。この対話篇はプラトンの真作偽作の意見が分かれているが、ペリクレス演説が注目を浴びる中、最近では真作として認める論稿が多く書かれている。⁴ こうしてプラトンは『ゴルギアス』のペリクレスをさらに〈サテュロス劇〉『メネクセノス』で茶番化しなければ腹が収まらなかったということになるであろう。こうして『ゴルギアス』篇の制作年代も〈B.C. 387-385〉という枠に収まる。プラトンがシシリー島に出かける前と後とで意見が分かれるが、帰国直後のB.C. 387年というのは『ゴルギアス』篇の制作年代として異論はなさそうである。

以下の『歴史』からの引用部分はカーンが指摘するところではないが、トゥキュディデスの史家としての見識を公言している個所としておもしろい。〈演説：logos〉

の取り扱いに関する所見である。

I-22 更に各人が戦争を始めようとして、または既に開戦してから、〈演説で述べたこと（hosa men logō eipon hekastoi）〉は、私自身が聴いた場合でも、各地から私に報告してくれた人々にとっても、語られたとおりに正確に思い出すことは困難であった。それゆえに私は実際に語られたことの全体的な主旨に可能な限り迫りながら、各人がその時々直に直面した問題について最も必要なことを述べたと私に思われたとおりに〈記述する（graphein）〉ことにした。

（藤縄謙三訳『歴史』第Ⅰ巻、22——下線による強調は筆者による。）

ここでトゥキュディデス自身が語っていることは、とくに演説に関することである。演説を再現するということは演説者が何を言おうともその主観性をふくめ語った内容をそのままに再構成して、自分の意見を差し挟まないことを意味する。しかし、このわざわざの主張は演説部分でないところで自分の見解や解釈を交えたコメントをおこなうのだという主張のコロラリーとなっている。ということはたとえばペリクレスの演説部分のところはトゥキュディデスは自分の判断はさし控えて、ペリクレスの主観的判断をそのままに再現することに努めるということである。しかしそれに関するトゥキュディデスの主観的コメントは、別にあるのだと言っている。史家のトゥキュディデスは時々顔を出して、自分の記述した史実を論評する。

このような叙述上のずれを利用してカーンはドゥ・ローミイの所見を覆す。以下に掲げる引用は、記載されている3つのペリクレス演説のうち第2番目のもの、B.C. 431年冬に行なわれた、有名な戦没者追悼演説からのものである。『歴史』第Ⅱ巻におさめられている。

吾々が享受している政体は、隣国の法律を模倣するようなものではなく、むしろ吾々自身が他の人々の模範になっているのである。そして少数者ではなく、多数者によって治められているがゆえに名称においては民主制と呼ばれている（*dēmokratia kekētai*）。……Ⅱ．37。

これはペリクレスの演説部分であり、トゥキュディデスにしたがえば、ペリクレスの演説の本質が忠実に再現されている筈である。ここでペリクレス自身は、自分の国の政体（*politeia*）は、少数者ではなく、多数者によって治められているがゆえに名称においては〈民主制と呼ばれている（*dēmokratia kekētai*）〉と述べている。（*kekētai*は*kalein*〈呼ぶ〉の受動完了形）

しかし続く第3番目のペリクレス演説の再現部分（60-64）が終わった直後の65節で、ペリクレスについて史家ではなく評者トゥキュディデスが論評する。そこで彼は、ペリクレスが民衆に迎合しなかった真の政治家であり指導者であったことを強調して次の自分の判断を提示している。

かくして言葉の上では (tō logō) 民主制 (dēmokratia) であったが、実際には (ergō) 第一人者による支配 (hypo tou prōton andros archē) になっていたのである。

(この個所は〈少数者ではなく、多数者によって治められているがゆえに名称においては民主制と呼ばれている〉という上記ペリクレス自身の再現された演説の主張とはことなっており、トゥキュディデスの判断によれば実際にはという意味である。：筆者補記)

演説するペリクレス自身の政体の判断と、トゥキュディデスによる判断は違うのである。名前においては民主政とよばれていたが実際には〈第一人者支配政〉だったと、演説するペリクレスの所見を覆している。

ところでプラトンの『メネクセノス』のペリクレス追悼演説では、次のように語られる。

ある者はこの国制を民主政とよび (kaleis), ある者は別な気に入った名で呼ぶ。実際には (tē alētheia), それは民衆の賛同に裏付けられた最も優れた者の支配 (aristokratia) なのである。『メネクセノス』238c-d.

日本語訳は岩波版プラトン全集10所収の津村寛二訳による。

この発言は〈kalein (呼ぶ)〉という同じ言葉も含めてトゥキュディデスの主張に言葉遣いもそのままに、不自然にそっくりである。

このことから、トゥキュディデス版ペリクレス演説の主張、トゥキュディデス自身の判断による主張、ソクラテス／プラトン版ペリクレス演説の主張が区別される。そしてこの3者を突き合わせてみると、ソクラテス／プラトン版ペリクレス演説は、トゥキュディデス版ペリクレス演説とトゥキュディデス自身の判断をトゥキュディデスの『歴史』第Ⅱ巻を典拠として確実に前提して、トゥキュディデス版ペリクレス演説の主張に対してトゥキュディデス自身の判断を追認して、言い方もそのままに意図して転用しているということになる。

だから「プラトンが念頭に置いていたのは、何かほかの失われてしまった追悼演説ではなく、(『メネクセノス』制作時点の：筆者補記) 近年には刊行されていたと思われるトゥキュディデス自身の著作である」とカーンは結論する。(上掲論文222-223頁)

この論述やその他の論述を援用して、カーンはドゥ・ロミイに代表される、プラトンがトゥキュディデスを知らないという学説を覆せると考えている。確かに成功していると筆者も考える。確かにそう思うのであるが、しかし、ドゥ・ロミイの『トゥキュディデスとアテネ帝国主義』の結論部を読み返すと、プラトンの〈不知〉を主張するときの彼女の論述は、カーンが紹介するように単純明快な断言となっていない。トゥキュディデスとプラトンの逆接した形での余りの合致に驚き戸惑っているのである。カーンの論文を読むことがあったら彼女は直ちにその拘りを捨てたのかもしれない。この合致に関して

は筆者もやはり非常にこだわりと驚きを持っているので、欲望論というテーマを介して次節でこの問題を論じる。

II. 『ゴルギアス』とペリクレス

『ゴルギアス』篇はペリクレス指導下アテネの政治の現実をプラトンの眼から具体的に描いているのだが、プラトンのその記述が、トゥキュディデスの『歴史』と筋書きが全く同じでありながら、逆の視点から記述されていることは再び全く不自然に思われる。トゥキュディデスはキモン—テミストクレス—ペリクレスの膨張政策と、とりわけ素晴らしい指導力を発揮したペリクレスを全面肯定し、プラトンはこの筋書きをそのままそっくり全面否定する。この過程は、アテネの自然正義に基づく膨張欲望に準ずるのであって彼らの思考は常に利害計算であり〈ブルーデンシャル〉であるが、そのことをトゥキュディデスは大いに肯定しているのに対し、プラトンはこの膨張欲望の過程を全面否定するのでありその観点は利害ではなくモラルである。

しかし、さらに眼をひくのが、ミルティアデスの子キモン—テミストクレス—ペリクレス—ペリクレス以後の(クレオンやアルキビアデスなどの) 継承者を同じように両者が掲げ業績をおおいに評価することも同じなのだが、そのおおいなる評価の白黒が全く逆であることが、不自然の極みである。かれらはそれぞれアテネに多大なる貢献をした大物政治家たちである。とりわけペリクレスはその中でも逸材である。

『歴史』の第Ⅰ巻からアテネが強力になっていく歴史に貢献した指導者として、ミルティアデスの子キモン(I. 98, 100, 102, 112等参照)、そしてテミストクレス(I. 14, 74, 91, 93, 135, 136, 137, 138)と彼らの業績が段階的に称揚されている。そして第Ⅱ巻65節において彼らの最終継承者ペリクレスの指導者振りの紹介を通して絶賛は最高潮に達している。そしてそれ以降ペリクレスのような〈マクロ的な計算力(prudence: 合理的策知)〉を欠くクレオンやアルキビアデスなどの指導が原因でアテネは滅びるという筋書きがたどられている。(第Ⅱ巻65節を参照)⁵ この節は『歴史』のなかで極めて重要な個所として知られる。対応のため引用したが、長くなるので上の筆者による要約にとどめる。その代りプラトンの『ゴルギアス』篇で上記『歴史』の個所に不自然に合致する重要な対応個所を引く。

そして、君がいましていることも、カルリクレスよ、これとそっくりのことなのだ。つまり、人びとが欲しがっていたものでもてなしながら、人びとにご馳走をした連中、その連中を君は褒めそやしているのだ。また、人びとのほうは、この連中が国家を大きくしたのだと言っているが、事実はいさ、あの昔の政治家たちのせいで、国家はむくんでふくれ上り、内部は膿み腐っているのだということに気がつかないでいるのだ。なぜなら、あの昔の政治家たちは、節制や正義の徳を無視して、港湾だとか船渠だとか、城壁だとか貢租だとか、そういった愚にもつかぬもので国家を腹いっぱいにしてしまったから

なのだ。だからあとで、あのいま言われたような病気の発作が起った場合には、人びとはその責任を、ちょうどその時傍にいて忠告する人たちに負わせて、この災厄の真の責任者である、テミストクレスやキモンやペリクレスのほうはこれを褒めそやすであらう。そこで、要心しないと、人びとは君に向って攻撃してくるかもしれないのだ。それはまた、多くの仲間であるアルキビアデスについても言えることだけれどもね。人びとが新たに獲得したものだけではなく、最初から持っていたものまでも、その上に失うようなことになった場合にはだよ。君にしても、アルキビアデスにしても、その災厄の真の責任者ではなくて、おそらくは、副次的な責任があるだけだろうにね。『ゴルギアス』(518e1-519b2)

ここで〈国家の政治に関する仕事にたずさわりだしたばかりの(515a)〉カリクレスはアルキビアデスの境遇と同様、当時の民会で弁論を弄して演説する若い政治家として位置付けられている。(彼等の世代の貴族／kaloi kagathoi達が置かれた不運な政治的境遇については、第一章註9に掲げたフォレスト論文を参照)

アテネの隆盛に寄与したとされたミルティアデスの子キモン—テミストクレス—ペリクレスの評価が全く逆転している。〈人びとのほうは、この連中が国家を大きくしたのだと言って〉褒めそやすけれど〈事実はしかし、あの昔の政治家たちのせいで、国家はむくんでふくれ上り、内部は膿み腐っているのだということに気がつかないでいるのだ。なぜなら、あの昔の政治家たちは、節制や正義の徳を無視して、港湾だとか船渠だとか、城壁だとか貢租だとか、そういった愚にもつかぬもので国家を腹いっぱいにしてしまったからなのだ。〉というトゥキュディデスが聞いてあきれ減茶苦茶な評価になる。上記の三人の膨張主義、帝国主義政策はアテネ国家とアテネ市民を欲望充足／プレオネクシアの亡者にしただけだという。

とりわけペリクレスはその最大の責任者として攻撃されている。『ゴルギアス』の主要なテーマが演説を弄することに長けた政治家ペリクレス攻撃にあることほど明らかなことはない。その貢献度からするとキモン→テミストクレスとなり最高峰がペリクレスである。何の貢献かという、アテネとアテネ人の生活をプレオネクシア、自然の正義という悪徳でグズグズにしたという貢献であり、その最高トップがペリクレスになっている。そしてその後継者になる(クレオンや)アルキビアデスやカリクレスには副次的な責任しかないとして免責される。

このストーリーは、同一テーマを扱いながら評価が全く逆転している。これはプラトンがトゥキュディデスをパロディー化していると考えなければ余りに不自然ではないだろうか。筆者は、カーンの論文を読む以前に、このような筋を立ての逆転した同一性をただけでもって、プラトンがトゥキュディデスの『歴史』第Ⅰ／Ⅱ巻を読んでいたことを立証することが十分にできていると思っていたし、いまでもこのような観念史(history of ideas)的な手法の論証を有効だとおもっている。さてもし上の議論が有効ならば、『ゴルギアス』はペリクレス攻撃の書で

あると同時にとペリクレスを通じたトゥキュディデス攻撃の書でもあることになるだろう。

V. エーレンベルグの言葉を借りれば「トゥキュディデスがペリクレス式の帝国主義を僭主制としての帝国という性格付けを含めて容認していたことは明らかであり⁶⁾」, ドゥ・ローミイの言葉通り「ペリクレス, キモン, ミルティアデス, これらの疑うべくもない指導者たちをまさしく自分の知性の全力を挙げて尊敬したトゥキュディデス」⁷⁾なのであるから。

ところが当のドゥ・ローミイはプラトンはトゥキュディデスを知らない、厳密には知らないようだという。しかし、彼女の論評の仕方は〈知っている〉という自分の主張に戸惑っているように読める。彼女は両者の上のような逆接した同一／合致を信じがたい偶然としている。カーンが言うように、ヴィラモーヴィッツの権威がそれほどに強力だったのだろうか。

ドゥ・ローミイの『トゥキュディデスとアテネ帝国主義』の結論部の最後で論じられるプラトンの〈不知〉を導く様子を紹介しておこう。

互いに背中あわせの方向に向き合いながら、反対の目標を追いかけ全然異なる課題を設定していながら、トゥキュディデスとプラトンは一つの本質的な問題によって繋ぎ留められている。……異なる言葉を遣いそれぞれ異なる水準で、トゥキュディデスの仕事の最高の到達点を画する正義と力の対立が、プラトンにとっては知的出発点となっている。

歴史家として仕事をするトゥキュディデスは、その本性に従って人間行動を研究し、国際関係が提供するデータに基づいて結論を導く。それに対して、哲学者としてのプラトンは力と正義の本性そのものを探求する。そのために国内や個人のプライベートな領域から自分の目的の都合に合わせて、可能な限り単純な事例を使う。しかしながら、この二人が提出してくる主張は、実質的に同じである：トラシュマコシュとカリクレスはアテネ市民のように語るし、ソクラテスはメロス市民とほとんど同じように語る。唯一同一の論争があちらでは政治枠のうちに、こちらで哲学枠のうちにでなされているだけなのである。

と論じてきて、次のようなコメントを出す。

この〈交差(junction)〉は、プラトンがトゥキュディデスから出発していないことが確実だけに(論理的には出発しているように思ってしまうのだが)、それだけいっそう驚きに値する。プラトンがトゥキュディデスの作品を知っていることを裏付ける試みが時折なされてきた。しかしそれらは、トゥキュディデスがよく行うような、政治的危機段階に伴うモラルの混乱を分析しているようなプラトン側の文章に基づくものでしかなかった。……実際にプラトンにはトゥキュディデスの作品との接触(aquaintance)を示す言葉は一つもない。……はっきりした引用がなく「彼女はここに〈ギリシア人たちは多くの場合自分の主張の典拠を語らない〉とい

う註¹を付けている。この註の意味は何なのだろうか。ギリシア人は他人の作品に依拠していることを表明しないことが分かっているが、はっきりした言及という言質以外の証拠は信じないという歴史学者の禁欲を示しているのだろうか：筆者補記], ヒントもないし暗示 (allusion) もないし、痕跡 (エコー) もない。⁸

という。ほんとうにヒントもなければアリュージョンもなければエコーもないのだろうか。自分が繰り返し指摘してきた驚くべき、信じがたい類似性は何なのだろうか。表現上の言語の痕跡がない限り、事柄同士の呼応性はすべて偶然にしくはならないのだろうか。それが彼女の歴史学者としての科学的禁欲なのか、カーンの言うように過去の学説の権威による加圧なのか筆者にはわからない。

ヘロドトスをあのように大胆にパロディー化するプラトンが、自分が一番関心を寄せるB.C. 5世紀末のアテネの政治状況を語るトゥキュディデスの筋書きのパロディー化 (逆転) を思いつかない筈がない。言語的痕跡がなくても、〈観念の歴史 (the history of ideas)〉という観点からはプラトンがトゥキュディデスの作品を知っていることを十分に確証することができる。遡及して語るならば、プラトン自身がこのような観念史的な営みを行っていたということである。

当論もプラトンからヘロドトスとトゥキュディデスに遡及するそのような観念史的な作業を行ってきたが、それに加えてカーンに代表される言語上の精緻な比較による今日の研究を合わせ考えれば、ヘロドトスとトゥキュディデスの作品をプラトンやその同世代の知識人たちが周知していたことは歴然とするのではないだろうか。

しかし、ドゥ・ロミイは自らが論じてきた逆接的な同一性の本質をよく見抜いていたのではないだろうか。

彼女は、この〈交差 (junction)〉を見事に象徴する文章を最後に残して筆を擱いている。

このようにして、思想と行動の間の対立を永遠に象徴するソクラテスとアルキビアデスのカップルの傍に、ソクラテスとトゥキュディデスから成るもう一つ別のカップルを置いてみるができるかもしれない。この二人はアテネ人としても同世代としても兄弟のように近密な関係で結ばれているのだが、しかしそれぞれ視線はヤヌスのもつ二つの顔のように別々の方向を向いている。⁹

彼女はソクラテス (469~399) の背後にプラトン (c. 427~347) の像を重ねている。問題はトゥキュディデス (c. 460~c. 400) とソクラテス／プラトンなのだから。¹⁰

結 語

ここで問題となっているのは、限度のあるものを分かち合う／参加して分担する〈シェア〉の思想と、〈限度なしの獲得〉の思想との抗争である。伝統的〈ゼウスの正義〉とB.C. 5世紀末に台頭してきた利害合理性の新

思想〈自然の正義〉との闘ぎあいである。ギリシャ語でいえば、限度あるもののシェアは分かち合うこと、参加することを意味する動詞〈metechein〉、名詞化すればメテクシス (中間を取る・適度を取る) であり、それに対して限度なしの獲得、限度を超えてより多くとる、分つことなく獲得競争をすることを意味するのが〈pleon：より多くechien：取る〉、名詞化すればプレオネクシアである。

単純化すれば、プラトンが支持したのはメテクシスであり、それに対抗してプレオネクシアを支持したのがトゥキュディデスである。B.C. 5世紀末にシェアの思想は利害獲得の思想にとってかわられた。驕り (hybris) の意識なしに畏れもなく他者を凌いでより多くを取るという思想が、B.C. 5世紀末のアテネを席捲したということである。メテクシスの思想にとっては、等しい取り分 (equal share：to ison), 正しい分け前 (just share：to dikaion) というのが正義である。¹ プレオネクシアの思想にとっては、より多くを取るものが正義である。コンテクストは違うがどこかで聞いた話である。

かつて歴史家たちが、貪欲 (avarice) の見方の主要な転換がスコットランド啓蒙思想において行われたことを確証してから久しい。中世がこの貪欲をはげしく弾劾したのに対して、スコットランド啓蒙思想家は貪欲 (greed) を〈合理的自己利害 (rational self-interest)〉と命名し直して、ハーシュマンが明らかにしたように、誇りや支配への渴望 (lust for glory and power) のようなもっと破壊的でさえあるような欲望に対抗しそれらを抑制する仕事を与えた。²

われわれの世界が限度をもたないということはある得ない。特に現代ではこのような限度が露呈してきている。最終的にはシェアすることを学ばなくてはならないことが切実になってきた昨今である。

プレオネクシアは、『ゴルギアス』篇を読んだニーチェが〈Mehr-haben-wollen〉とドイツ語化して権力意志論の源にしていることについては先に触れた。マルクスの〈Mehrwert〉もアリストテレスの『政治学』経由でプレオネクシアに遡及すると考えられる。Mehrwertは〈剰余価値〉と訳されているが、余剰／剰余とは〈余り・残り〉というニュアンスの強いことばである。〈pleon〉も〈mehr〉も〈より多く〉という〈多い〉の比較級であり〈超過：über/sur〉の意味を持つが〈余り〉というような防衛的な意味はない。あくまで過剰なのである。ニーチェの権力意志が〈剰余獲得への意志〉では様にならない。それと同じようにMehrwertも〈より多くの価値〉を意味し、まさしくより多くを取るプレオネクシアの限度なしの膨張欲望、無限の拡大衝動に根差した自然主義的な言葉ではないかとおもう。プラトンからプレオネクシアは、アリストテレスを通して以上のように様々な社会理論に伝わっている。それだけ使いがいのある概念なのだ。

現代のアリストテリアンは〈潜在能力 (capability/dynamis)〉を掲げる哲学者ヌスバウムや経済学者センバ

かりではなく、ジョン・ロールズも十分にアリストテレス好きな法哲学者である。そのロールズの『正義論』に次の言葉がある。

この正義論の取り組みが伝統と合致しないと思われるかもしれないが、合致していると私は信じている。アリストテレスが正義に与えたさらに特有な意味、またそこから最もよく知られた定式が引き出される特有な意味は、〈プレオネクシアを差し控える〉ことである。〈プレオネクシアを差し控える〉とは、他人に属するもの、たとえば財産、報酬、地位その他などを奪い取ることによって、あるいは彼に正当に属するもの、たとえば約束の履行、借金の返済、相応しい表敬などをその人に拒絶することによって、自分の利益を獲得することを控えることである。この定義が行為への適用を考えて作られており、ひとびとが、自分の性格の恒久的な要素として、正しく行為するという安定した効力ある欲望を持つ限りにおいて正しいと考えられていることは明らかである。アリストテレスの定義は、しかしながらこのように、個人に固有に属しているもの、かれに正当に帰属するものという考えを明らかに想定している。ところがこのようなひとに与えられている資格は社会諸制度から、そしてこの諸制度のもとで生じる当然の期待からしばしば奪われていると私は思う。アリストテレスがこの点に同意しないと考える理由は何もないし、かれはこのような要求に応えるだけの社会正義の構想をたしかにもっている。私が採用するこの定義は、基礎的構造の正義という最も重要なケースに直接適用できるように考案されている。伝統的考えに抵触するものはなにもない。³

「たしかに最善の国制とは、それによっていかなる人も最善のことをなし、幸福に生きることができるような秩序でなければならないことは明白である。」（『政治学』1324a24）というようなアリストテレスの国家の意味付けを起点にして、ロールズは上のような解釈をするのであろう。

しかしプレオネクシアという膨張欲望の回路に一度からめとられると抜け出すことが困難になるのも確かなことである。

ペリクレス自身が第3番目の演説でこんなことを言っていた。

この支配権（archē）を失えば他を支配して買ってきた恨みを晴らされる危険に追い込まれるのだ。それだから、たとえ現今の事態に狼狽して、平和裡にこの支配権を手放すことを誰が主張しようとも、それはもはやできない相談なのだ。諸君がすでに手にしている支配権は、僭主政治のように、その掌握は正しくないかもしれないが、それを手放すことはまことに危険なのだ。『歴史』Ⅱ．63

（訳は筑摩書房版世界古典文学全集の小西晴雄訳を使用。）

トゥキュディデスが語るプレオネクシアをエーレンベルグが評する言葉がある。

帝国主義は国家の特殊形態あるいはひとの特殊性格あるいは哲学的教義から生ずる結果なのではない。それは力（power：archē）が自分固有の境域内で行使されるには余りに大きくなりすぎたとき、この力から必然的に生ずる結果なのである。トゥキュディデスがプレオネクシアを語る時意味しているのは同じことだが、彼はそれをただひとの性格の問題として見ていた。かれは力を信用していたのである。かれは権力を握った退廃した人間の悪を知っていたのだが、〈力が退廃させる〉ことを知らなかった。⁴

トゥキュディデスは、クレオンやアルキビアデスではなく、ペリクレス、あるいは第二のペリクレスがいればアテネは滅びることはなかったという。トゥキュディデスのプレオネクシアに関する把握の甘さを指摘した言葉である。

プラトンはプレオネクシアがその然るべき境域を破り超えると、とどめようのないエロスの奔流〔プラトンはエロスとプレオネクシアとを同等視している（572e-573a）〕となることを『国家』で分析したのである。

序註

1. 岩波文庫版『国家』（上）、430頁、註6。
2. E.R. Dodds, *Plato Gorgias: a revised text with introduction and commentary*, 387-391, Appendix: Socrates, Callicles, and Nietzsche, Oxford, 1959. ニーチェ『権力への意志』、47参照。
3. Ryan K. Balot, *Greed and Injustice in Classical Athens*, 32, Princeton University Press, 2001. このバロットの著書は、ホメロス・ヘシオドス・ソロン（ヘロドトス）—トゥキュディデスとアルカイック期から古典期へと時代が変遷することによって、〈欲望〉の意味が変わってしまったことを丁寧に重厚に追求した労作である。ロイド＝ジョーンズが言う〈ゼウスの正義〉から脱世俗化し白々とした〈自然的正義〉をへてアリストテレスに代表される同等な市民の間の〈配分の正義〉の問題を扱っている。本論もこの研究の恩恵を大いにこうむっている。ヘロドトスは〈ゼウスの正義（ソロン）〉と〈自然的正義（トゥキュディデス）〉の中間、媒介者に位置づけられている。（同、124）
4. Keimpe Algra, *Observation on Plato's Thrasymachus: The Case for Pleonexia*. In *Polyhistor: Studies in the History and Historiography of Ancient Philosophy. Presented to Jaap Mansfeld on His Sixtieth Birthday*, edited by Keimpe Algra, Pieter Willem van der Horst, David T. Ruina, and Jaap Mansfeld, 41-59, Leiden: Brill. 同書『ポリュヒストル（Polyhistor）』51頁の註23に引用箇所が列挙されている。

『国家』第Ⅰ巻のトラシマコス挿話において、

pleonexia が359c5において, *pleon echein* が343d5; 349b3-e12において (4回), そして *pleonektein* が344a1; 349b8-350c1において (10回) 使われている。第II巻で説明的に, *pleonektein* が362b7で (2回) そして365d6で使用されている。そして第VIII—IX巻の僭主に関する論議のコンテクストにおいて, *pleonexia* が586b1, そして *pleon echein* が574a8で使用されている。以上が『国家』におけるこれらの術語の使用範囲である。

これをバロットが整理したものを便宜のため掲げておく。

Pleonexia (*pleonektein* と *pleon echein* という関連語とともに) 343d5-6, 344a1, 349b3, 349b8, 349c1, 349c4, 349c6, 349c8, 349c12, 349e12, 349e12-13, 350a2, 350b1, 350b8, 350b14, 350c1, 359c5, 362b7 (twice), 365d6, 574a8-9, 586b1: Balot, *ibid.* 237, note. 7

5. Balot, *ibid.* 237

6. 日本語では, 真下英信著『伝クセノボン「アテーナイ人の国制」の研究』慶應義塾大学出版会, 2001年, のなかにギリシャ語テキストと訳注付きで収められている。(引用は同書, 1章, 〈2節〉より15頁)。

Loeb版ではXenophon, *Scripta Minora* のうちにある。また英語版でギリシャ語テキストと序論, 対訳, 註釈つきのものにJ.L. Marr and P.J. Rhodes, *The 'Old Oligarch' The Constitution of the Athenians, Attributed to Xenophon*, The Cromwell Pressがある。またRobin Osborneによる, 序論, 訳, コメントリー付き(ギリシア語テキストなし)の以下のものがある。*The Old Oligarch, Pseudo-Xenophon's Constitution of the Athenians*, second edition, The London Association of Classical Teachers, 2004.

第一章註

1. W.G. Forrest, *Herodotus and Athens*, 2, Phoenix 38: 1-11, 1984.

2. 桜井万里子, 『ヘロドトスとトゥキュディデス』, 16頁, 岩波書店, 2006年。岩波書店刊行のギリシア喜劇全集1 (2008年) 野津 寛訳『アカルナイの人びと』では, 〈こうして戦争のそもそもの発端が, すべてのヘラス人の頭上に, 三人の売春婦によってぶちまけられたのです。〉(520-530) という訳になっている。

『歴史』の有名な第I巻の「序」に続く1—5節が戦争の原因となった〈女の争奪戦〉の話を語る。

3. ロイド=ジョーンズ, 『ゼウスの正義—古代ギリシア精神史』, 真方忠道・真方陽子訳, 岩波書店1983年。

この著書の趣旨は, アガメムノンに代表される古来のギリシアの物語の主人公たちは, 『イーリアス』からギリシア悲劇を貫き, 神によって遣わされる迷妄(アーテ: *atē*) によって情動にかられて分別を失い〈驕った〉行為を犯してしまう(ヒュブリス: *hybris*)。神によって贈られた迷妄が動機であって, 当人の意図

行為でなくとも〈*atē-hybris*〉の図式に従う不正はゼウスの正義によって懲罰されるというものである。ロイド=ジョーンズはこのゼウスの正義をトゥキュディデスの『歴史』, メロス島の虐殺やシケリア遠征にさえも当てはめようとする。そのような意味で, トウキュディデスの『歴史』も〈悲劇的歴史 (tragic history)〉に組み込まれてしまう。(同書, 224-225参照)。

ロイド=ジョーンズは, 5世紀末のソフィストの合理主義ばかりでなくプラトンという新思想も嫌いなのである。とにかく彼にとってはまずは「尊き正義の女神(ディケ)は〈傲慢 (*hybris*)〉の子粗暴なる〈飽満 (*koros*)〉が, ものみなを呑み尽くさんと猛り狂うを鎮め給うであろう」(同書, 110頁/ヘロドトス『歴史』VIII. 77, 日本語訳は松平訳を使用した) ありきなのである。Hugh Lloyd-Johns, *The Justice of Zeus*, University of California Press, 1971.

しかし, ヘロドトスが物語るギュゲス—クロイソス—クセルクセスに亘って応報的正義が連鎖することの指摘は「ゼウスの正義」がまともに当てはまる記述として見事である。(同書, 96頁以降参照)

4. Andrew Laird, *Ringling the Changes on Gyges: Philosophy and the formation of fiction in Plato's Republic*, *Journal of Hellenic Studies*, vol. 121, 12-29, 2001. 興味深い面白い論文である。当論文の文脈 (fictionality) に関しては, 15頁以降を参照のこと。

5. ペンギンクラシックスの『ギリシアのソフィストたち』(*The Greek Sophists*, translated and with an Introduction and Notes by J. Dillon and T. Gergel, 2003) の5章 *Antiphon*, (pp. 133-202) の〈知られている作品の断片〉の「真理について (on truth, *peri tes alētheias*)」の節 (146-158) からの引証 (150-151) である。尚, 同時にCambridge Texts and Commentariesシリーズ, G.J. Pendrickによる *Antiphon The Sophist, The Fragments*, Cambridge University Press, 2002, からギリシア語テキストと訳文を参照し, 補完している。同書158-163。

6. レアード (Laird) 同論文13頁, と註5参照。

なお, キケロの『義務について』(*Cicero, De officiis*) は, ストアの哲学者パナイティオスの議論を検討するという形で書かれている。そのパナイティオスの議論というのは『国家』篇第II巻冒頭, 〈正義〉を三種類の〈善いもの〉のうちのどれに分類するのかという, 文字通りプラトンの中心テーマを引き継ぐものである。

〈善いもの〉は, ①それ自体のため愛されるもの, ②それ自体のためではなく, そこから生じる結果のゆえに持ちたいと願うもの: 有用なもの (*ophelimon*), ③それ自体のためにも愛し, それから生じる結果のゆえにも愛するようなもの, の三種類に分類される。ソクラテスは〈正義〉を第三種類の善いものに分類する。

このテーマを請けて, ソクラテスの議論を正当化することがパナイティオスの議論のテーマであるし, 同時にキケロ自身のテーマともなっている。

このようなきわめてプラトンの著作の第III巻9節で, ギュゲスの指輪の話がプラトンからそのまま転載

され、〈プラトーンが引用したこの例は虚偽捏造の話にすぎぬという人がある〉と報告し〈この言い方は、なんだかプラトーンともある人をして、こんな話をさも事実でありあるいは可能であると主張せしめているようでおかしい〉としている。それに対してキケロは事実問題ではなく論理的仮定としてプラトンはこの話を提示したのだと反論している。(岩波文庫版、泉井訳『義務について』160頁参照)

しかしキケロの議論はプラトンの〈ギュゲスの指輪〉を論理的仮定として弁護するのみであって、ヘロドトスへ遡及することなくソフィストの自然状態論、ゼウスの正義から自然の正義への歴史的移行、B.C. 5世紀末のアテネを席捲した有用性(ὀφελιμον, chrēstos)の論理、ペリクレスやソフィストのアテネの膨張欲望に仕えるprudentialな演説や弁論などとの歴史的連繋を指摘することがない。

しかし、ドイツのクラウス・ライヒが『カントとギリシャ人の倫理』(Klaus Reich, *Kant und die Ethik der Griechen*, S. 31, Verl. Mohr, 1935)において、〈正義〉すなわち〈平衡は制限なしにそれ自体として輝く(Aequitas enim lucet ipsa per se)〉(Cicero, *De officiis*, Liber primus, 9 (30), Reclam, 1976)というキケロの言葉がプラトンの上記の正義論と連関してカントの〈よき意志とは、その全き価値を自分の内に具えて、一つの宝石のようにそれ自体だけで輝く(so würde er wie ein Juwel doch für sich selbst glänzen als etwas, das sein vollen Wert in sich selbst hat)〉(Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, S. 11, Felix Meiner Verl. 1965)に繋がりうることの示唆は注目に値する。正義のそれ自体的価値ということでプラトンは『国家』を通じてキケロの『義務について』につながり、『国家』の議論を受けたキケロは『義務について』を通じてカントの『道徳形而上学原論』に繋がる。

7. ドッズは、出身区アカルナイの名まで挙げられているこのカリクレスを実在の人物で若死にしたため、忘れ去られた人物としている。同書13頁。かれは民主派ではなく、アルキビアデスと同じく本当は反デモクラティックな志向を持っていることは、この後にソクラテス自身がかれをアルキビアデスと同列にしていることからわかる。このカリクレスのような人間を輩出するにいたった経緯については、上記のフォレストの論文が参考になる。かれは「アテネ人のある世代ギャップ」という論文を残している。そこでアルキビアデスやプラトンのカリクレスの鬱屈した貴族の世代の分析をしている。アンティポーン、クリティアス、フリュニコス、ペイサンダー、アリストクラテース、テラメネース、アルキビアデス等をあげて、アルキビアデスの誕生年(ほぼ確定的なB.C. 450)世代の貴族たち、いわゆる〈kaloi kagatoi〉の青年たちの時代状況を分析している。大体420年代には大人になっているかれらの政治に関する直接経験は「ペリクレスの死の直前か直後に」始まっているという。

430年代に20歳を超えている青年にとって、デモクラシーはあまりにも確固たる自明なものになっていた。興奮するものが政治的に何もなく、時代に倦んで生産

的な目標も掲げることでもできず、結局はクレオンのようにレトリックなどの技芸を身に付けてアテネの指導者になるための出世競争を演じざるを得ない世代としてかれらを描き出している。カリクレス同様、上記の〈古き寡頭派〉もこのような若い世代の貴族として把握され、かれももし政治家を目指したら、アルキビアデスやカリクレスと同じ生涯を辿ったに違いないと論じている。W.G. Forrest, *An Athenian Generation-Gap*, 38-39, 47, Yale Classical Studies, vol. 24, 37-52, 1975.

8. E.R. Dodds, *Plato: Gorgias*, A revised text with Introduction and Commentary, 30-34 (Plato and Athens), Oxford, 1959.

『ゴルギアス』がプラトンのアテネ政治からの決別の書だというドッズが参照を指示する「第Ⅶ書簡」の該当箇所全体を以下に挙げておきたい。

第Ⅶ書簡は対話篇ではないからあまり読まれるわけではないので、いまは手軽に文庫版で入手もできない。とくにこの箇所だけがプラトンの当時の動向を示す証拠として引用されることが多い。

わたしも、かつて若かったころには、多くの人たちと同じ気持ちを抱いて、自分が一人前の大人になったら、ただちに国家公共の事柄に参画しようと思っていた。そんなわたしの身に、国政に関することはいくつもの偶発事がふりかかってきた。その次第はこうである。—当時の国政が多くの人びとの非難を浴びて、政変が起こった。そして、さる51人の者たちが支配者となって、その政変の先頭に立った。うち11人がアテナイ市域、10人がペイライエウス(ピレウス)の統治に当たり—双方がそれぞれに中央広場(アゴラー)および各市域の管理に必要な事柄を担当した—、残り30人は万事を掌握する専制支配者の地位に就いた。ところが、彼らのうちの何人かがわたしの親族や顔見知りであり、しかも、わたしが参画するにふさわしい仕事だからと、すぐさまわたしにさそいをかけてきた。若気の至りからわたしが興奮したのもおどろくことではない。わたしは、彼らがあれこれの不正のはびこった国民生活を改めて正しいあり方へと導きながら国家を運営してくれるであろうと思ったわけで、だから、彼らが何をするかを、熱心に見守っていた。ところが、この連中を見ると、たちまちのうちに、彼らはそれ以前の国政を黄金時代のごとく見せてくれるに至った。他のことはともかく、わたしが親しくしていた老ソクラテス、ほとんど何らのためらいもなく、当時の人びとのうちで最も正義にかなっていたと言っているこの人を、他のいく人かとともに、ある市民のところへ行かせようとまでしたのである。この市民を処刑するために強制連行してくるようというのだったが、彼らの意図は、実は、好むと好まざるとにかかわらずソクラテスを自分たちの実行行為に加わらせることにあった。彼はこれに従おうとしなかった。神をないがしろにした彼らの所業に加担するくらいなら、むしろあらゆる危険に身をさらすことにした

のである。一さて、こうしたでき事のすべてや、他にもこれに類した無視しえぬ事件を目にしているうちに、わたしは嫌気がさして、このときの悪事から身を遠ざけた。

しかし程なくして、三十人政権は倒れ、当時の国政もすべて廃止された。すると再び、徐々にではあるが、それでも公共の政治的活動にたずさわろうという意欲がわたしによりがえってきた。むろん当時もなお物騒然たるありさまであったから、不愉快なできごとが多かったし、体制の変革が重なれば、各勢力の間で敵に対する報復が行きすぎになるようなことがあったとしても、何らおどろくべきことではなかった。しかしながら、このとき復帰した民主派の人びとは、かなり穏健な態度をとったのである。ところが、またしても何かの偶然から、われわれの仲間だったあのソクラテスを、一部の有力者たちが法廷に召喚するという事態となった。しかも彼らが持ち出したのは神をないがしろにすることはなほだしい罪状で、万人中ソクラテスには最もふさわしからぬものであった。すなわち、神に対する不敬のことで、彼らは法廷に召喚し、またある者たちは有罪判決を下して死刑に処したのであるが、そのソクラテスこそ、当の彼らが亡命の身をかこっていたときに、亡命者たちを支援する仲間の一人に対してなされた神をもおそれぬ非道な連行に手を貸すことをよしとしなかった人なのである。(プラトン『第七書簡』, R.S.Black著『プラトン入門』所収, 内山勝利訳, 244-246頁, 岩波文庫, 1992)

9. Dodds, *ibid.*, 17-18参照。W.G. Forrest, *An Athenian Generation Gap*, 42, Yale Classical Studies, vol. 24, 1957.

第二章註

1. Charles H. Kahn, *Plato's Funeral Oration: The motive of the Menexenus*, in *Classical Philology*, LVIII, 1963. 221, 220-234.
2. Jacqueline de Romilly, *Thucydides and Athenian Imperialism*, From Politics to Ethics, 366, New York: Barnes and Noble, 1963./*Thucydide et l'Impérialisme athénien*, De la politique a la morale, 304, Belles Lettres, 1947.
3. Kahn, *ibid.* 220 & 233./Dodds, *ibid.* 24-25.
4. プラトンを反民主主義者として捉える論者が大半を占めるなかで、民主主義に固有な〈言論の自由(イセーゴリア)〉や『ゴルギアス』篇でカリクレスの〈率直な発言力(パレーシア)〉へ贈られるソクラテスの賛美などを取り上げて、プラトンの民主主義的志向を拾い集める作業を行っている研究者に、サラ・モノソン(Sara Monoson)というひとがいる。2000年刊の『プラトンの民主主義との絡み』の第7章「ペリクレスの記憶: プラトンのメネクセノスの政治的理論的重要性」の冒頭(181)は次の言葉で始まっている。

メネクセノスは普通思われている以上にはるかに興味を引く対話篇である。この対話篇でプラトンは、ソクラテスに意図的にアスパシアによって創作された追悼演説を朗唱させるのだが、それはよく知られた彼のレトリック(弁論術)批判を促進するためというだけではない。同時にこの対話篇は、ペリクレスがアテネそしてわれわれに対して持つ意味の、トゥキュディデスの構築という問題に取り組んでいるのである。

この箇所に付けられた註には、本論でも参照しているカーンの論文を含めた、メネクセノスに関する膨大な文献が拾い上げられ紹介されている。Sara Monoson, *Plato's Democratic Entanglements*, Remembering Pericles: The political and theoretical import of Plato's *menexenus*, 181-205, Princeton University Press, 2000.

その冒頭181頁に記されている文献一覧をそのまま以下に掲げておく。

「メネクセノスは好意的な注目を受けることのなかった対話篇である。その大半の理由は、ソクラテスの追悼演説の内容が伝統的な通説であるプラトンの政治的関心に合わないということである。一世代前の学者たちはこのテキストを、真作であることの抵抗し難い確証があるにもかかわらず偽作として扱っていたくらいである。—アリストテレスが二回の引用している(『弁論術』1367b8, 1415b30: 〈ソクラテスが言ったように、アテナイ人の間でアテナイ人を称讃するのは難しいことではない〉: 『メネクセノス』235d参照。筆者補記。)真作を認めて今日研究者の関心は、プラトンが追悼演説のようなものを利用する理由を説明することに集中している。メネクセノスの弁論術批判に関しては、以下を参照。E.F. Bloedrow, “Aspasia and the Mystery of the Menexenus,” *Wiener Studien* 9 (1975): 32-48; Robert Clavaud, *Le Ménexène de Platon et la rhétorique de son temps* (Paris: Belles Lettres, 1980); L.J. Coventry, “Philosophy and Rhetoric in the Menexenus,” *Journal of Hellenic Studies* 109 (1989): 1-15; E.R. Dodds, *Gorgias: A Revised Greek Text with Introduction and Notes* (New York: Oxford University Press, 1959), pp. 23-24; M.M. Henderson, “Plato's *Menexenus* and the Distortions of History,” *Acta Classica* (Cape Town) 18 (1975): 25-46; Charles Kahn, “Plato's Funeral Oration: The Motive of the *Menexenus*,” *Classical Philology* 58 (1963): 220-34; Nicole Loraux, *The Invention of Athens: The Funeral Oration in the Classical City* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1986); Donald J. Maletz, *Plato's Menexenos and the Funeral Oration of Pericles* (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1975); Andrea Nightingale, *Genres in Dialogue: Plato and the Construct of Philosophy* (New York: Cambridge University Press, 1995), pp. 106-7; Stephen Salkever, “Socrates' Aspasian Oration: The Play of Philosophy

and Politics in Plato's *Menexenus*," *American Political Science Review* 87 (1993): 133-46; Arlene W. Saxonhouse, *Fear of Diversity: Political Science in Ancient Greek Thought* (Chicago: University of Chicago Press, 1992), pp. 111-22; J.A. Shawyer, *The Menexenus of Plato*, edited with an introduction and notes (Oxford: Clarendon, 1903). 追悼演説を〈貧弱に茶番化 (poorly executed spoof)〉したテキストという議論に関しては次を参照。Paul Shorey, *What Plato Said* (Berkeley: University of California Press, 1933), pp. 137-41; and A.E. Taylor, *Plato: The Man and His Work* (London: Methuen, 1949). メネクセノスがアテネ市民の追求した固有な政策を呼びかけたものという議論については次を参照。Pamela Huby, "The *Menexenus* Reconsidered," *Phronesis* 2, no. 2 (1957): 104-14; Kahn, "Plato's Funeral Oration"; and Maletz, *Plato's Menexenos*. アテネの皮肉な告発としてのメネクセノスという議論に関しては以下を参照。Bruce Rosenstock, "Socrates as Revenant: A Reading of the *Menexenus*," *Phoenix* 48 (1994): 331-47. 過去の文献の通覧に関しては以下を参照。Shawyer, *The Menexenus* (1903). 最近の文献の論評に関しては次を参照。R.E. Allen, "Plato's *Menexenus*, Translation and Commentary," in *The Dialogues of Plato*, vol. 1 (New Haven: Yale University Press, 1885), pp. 319-43.]

5. 『歴史』第Ⅱ巻65節は、I-22で演説の可能なかぎりの客観的再現を宣言した史家トゥキュディデスが、自分の史観とペリクレス自身の演説上での判断との違いを明示する密度の細い論述によって構成されている。
6. Victor Ehrenberg, *Polypragmosyne: a study in greek politics*, 48, *Journal of Hellenic Studies*, vol. 67, 46-67, 1947.
7. J. de Romilly, (英) *ibid*, 363, (仏) *ibid*, 302.
8. *ibid*, (英) 365-366, (仏) *ibid*, 303-304.
9. (英) *ibid*, 368, (仏) *ibid*, 305.
10. トウキュディデスに関する面白い見方がある。

「アテナイの *hēgemonia* [盟主としての支配] が徐々に *archē* [帝国支配] に変わっていったとすれば、どうやらその責任の一端は、介入を歓迎、いや進んで求めさえした同盟諸国の「多数者」にあるようである。」というのは、ドゥ・サント・クロワである。(馬場恵二訳, ドゥ・サント・クロワ「アテナイ帝国の性格」218, 『西洋古代論集Ⅱ』所収175-238. 東京大学出版会, 1975年。) 因みに〈同盟国〉は〈*symmakoi*〉〈隷属ポリス〉は〈*hai poleis hypēkooi*〉といわれている。同論文208頁。: de ste. Croix, *Character of the Athenian Empire*, 40, 31, *Zeitschrift für Alte Geschichte*, vol. III, 1954, 1-41.

ドゥ・サント・クロワの立場は徹底してデーモス支持のマルクス主義的観点であり、トゥキュディデスの高踏的態度を批判している。上の引用でも、アテネ民主国家の帝国支配への非難をおわせるトゥキュディデスの貴族主義的評価に対して、同盟諸国のデーモスがその支配をみずから歓迎し、進んで求めたのであ

てアテネ市民の膨張欲望政策による帝国主義的支配ではなかったのだというのである。

ドゥ・サント・クロワのトゥキュディデス評価はしたたかなものである。トゥキュディデスは自分の属した少数貴族という主観的観点からは、ことごとく多数者デーモスを過小評価しながらも、彼が客観的歴史家として報告する歴史的記述が〈自説反駁の材料を自ら提供するほどにまで、桁外れに客観的歴史家であった。言ってみれば、トゥキュディデスのニュース欄は編集担当のトゥキュディデスと食い違っているものであり、編集者自身つねに同じ口調で語っているとは限らないのである〉というものである(同書, 177-178頁)。このひとの書くものはとにかくイデオロギー的にはっきり単純明快であるが、エネルギーで舌鋒鋭く、思考に切れがあってシャープである。

ところで、ドゥ・ローミイの著書、1963年に刊行された英語版には約10頁ほどの「付言」(Additional Remarks, 369-379頁)が付加されている。そこで彼女はドゥ・サント・クロワの上記の見解に答えているのである。

アテネ帝国主義に関するトゥキュディデスの見方全体に疑いをさしはさむという問題が起きている、として、ローミイはドゥ・サント・クロワの上記論文を取りあげる。そして次のように語る。

著者はトゥキュディデスの出してくる解釈、僭主として振舞うアテネ、従属諸都市を奴隷化しようとするアテネ、かれらがアテネを憎悪し反乱を起こそうとしているとか、などはすべて実際ひとりの裕福な重要人物の解釈でしかないことを示すことに努めている。そしてかれは寡頭派のサークルで生き、アテネのデモクラシーに反感を持っていて、従属諸都市に関する情報の自分の入手先もこのデモクラシーに同じように反感を持つひとからのものであるとしている。しかし実際のところはそれらの都市のすべての民主派のひとびとはアテネの権威を高く評価していてアテネによって裨益されているため、アテネに忠実なのである—解釈は正しくなくとも事実は正しい、あのトゥキュディデスの『歴史』から明らかにように。(同書, 376-377)

と彼の主張を要約して、この主張の問題性を指摘し反論している。その内容を詳しくは紹介はしないが、その主旨は様々な資料がドゥ・サント・クロワの主張が首肯しがたいものであることを証明しているというものである。ドゥ・ローミイをはじめとして、ラーフラウプや若いパロットを含め、現代のわれわれの民主主義の創設者と言う観点にとどまらず、アテネ民主政が民主的価値体系を持ちながら、なぜ外国に対しては帝国主義的支配を何の抵抗もなく遂行することできたのかという観点からアテネ民主政を相対化して考える研究が増えているように思える。パロットの著書もそのような研究の強力なものの一つである。

上で紹介した、フォレストやフィンリーはそのような帝国主義という観点をほとんど意識していないよう

であった。やはりわれわれの民主主義の歴史が牧歌的ではなく、ブレオネクシアの荒みが影をさす中、このような翳った観点がギリシャの民主政にも投影されるのであろう。フォレストやフィンリーのようにアテネ市民が民主的制度を創設し、その下で指導者の議論を自分自身で理解し、自分で決断し、家族との別れや死の危険性を背負い、そのうえで戦場に出て行ったという筋書きで、アテネ民主主義を肯定するような見方はそれだけでは立ち行かなくなっている。

他国の征服によって利益を獲得するのが貧しい階級であるという意味で、アテネ民主政は帝国主義との関係なしには成立し得ない。(ドゥ・ローミィ, 同書, 74 〈英〉, 69 〈仏〉) アテネ民主政は、その意味で〈帝国主義的民主政 (Imperial Democracy)〉であった。この所見こそプラトンのものでもあった。尚〈Imperial Democracy〉については、H.R. Immerwahr「力の病理学とトゥキュディデスにおける演説 (Pathology of Power and the Speech in Thucydides)」, 『トゥキュディデスにおける演説 (The Speech in Thucydides)』所収, 27, edited by A. Stadter, The University of North Carolina Press, 1973. 参照。

結 語 (註)

1. Ryan K. Balot, *Greed and Injustice in Classical Athens*, 『古典期アテネにおける貪欲と不正義』5-6.
2. ibid. 18, & A. Hirschman *The Passion and the Interests*, political argument for capitalism before its triumph, 1977. esp. part 2.

ハーシュマンのこの著書は日本語訳があり当時盛んに読まれたものである。アルバート・O・ハーシュマン, 佐々木毅/旦 裕介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局, 1985. 特に第二部(章)とされているけれど、引用の部分は特別に対応した箇所があるわけではなくバロットが取りまとめたものである。個々に引用した文章は、原著では40-41, 日本語訳38-39頁に書かれている。

3. John Rawls, *A Theory of Justice*, 10, Oxford, 1971. 註によれば、ロールズは、G. ヴラストス (Vlastos) の解釈に従っていると語る。実際に、アリストテレス特有の正義の意味とは……〈ブレオネクシアを差し控えること〉以下の説明は、ヴラストスの論文「プラトンにおける正義と幸福」からの引用である。(Gregory Vlastos, *Justice and Happiness in the Republic*, 115-116, in *Platonic Studies*, 111-139, Princeton University Press, 1973) ヴラストスは〈ブレオネクシア〉につけた註16で、〈私は、この語の十分で適切な英語訳に関しては絶望している〉といいその理由を説明している。又W.F.R. Hardieの *Aristotle's Ethical Theory* (Oxford, 1968) をよく読んでいる。

4. Victor Ehrenberg, *Polypragmosyne: a study in greek politics*, 53, *Journal of Hellenic Studies*, vol. 67, 46-67, 1947.

なお、ヘロドトスやトゥキュディデスの〈pleonexia〉の用例を挙げなかったが、エーレンベルグのこの論文(49-50)が解説を加えながら両者の用例を拾い上げている。